# 仮面ライダーライノ

ナベリウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーライノ

【Ｎコード】
Ｎ７８８８Ｅ

【作者名】
ナベリウス

【あらすじ】
時は２０ＸＸ年。人類の滅亡を目論む謎の集団「タルタロス」と仮面ライダー達の戦いが今、始まる・・・。

## STORY1　始マリノ時

カフェ、
「エデン」・・・。

「・・・君？・・・・健司君？もしも～し？」

「・・・へぇ？・・・・うわっ、あ、すいません！！」しどろもどろしながら起き上がったのは、髪を金に染めた黒い瞳の、年齢２０位の少年、久流健司（くりゅうけんじ）だ。

「もう、私以外にこの店で働いてるのは健司君だけなんだから。しっかりしてよ？私一人で切り盛りするの大変なんだからね？」膨れっ面をしながらそう言ったのは、真っ黒な髪をポニーテールをした、真っ黒な瞳の、年齢は恐らく２０代後半の女性、蝉川楓（せみかわかえで）。その顔立ちは美人と言っても全く差し支えない。

「・・・すいませぇん。嫌、この茹だるような暑さのせいで昨日寝れなかったんすよね」健司はポリポリと頭を掻きながら言う。

「暑かったって・・・クーラーとか無いの？幾らなんでもそこまで貧困生活って訳じゃ無いでしょ？」楓は健司にそう問い掛ける。

「あの、うちクーラーあるにはあるんすけど、壊れてて使えないんすよね、取り敢えず、今週末に修理出そうと思ってるんすけど」健司はそう言って、あはは・・・と苦笑いを浮かべる。

「それはまた・・・この季節には大変ねぇ。・・・あ！もう閉店の時間だ！健司君、お疲れ様」楓は健司にそう声を掛けた後、店の奥

に入って行った。

「はぁ～、結構寝てたけど疲れたなぁ・・・俺も帰るか」健司はそう言って店の片隅に置いていた自身の鞄を取り、ポケットからバイクのキーを取り出しながら店を出た。

この時、彼は知る由も無かった、この後に訪れる悲劇の事を・・・。

数十分後・・・。

「さぁて、カスども殺るだけの簡単な仕事だ。誰が行く?」黒い長髪に切れ長の黒い瞳の男性が、他の三人の人物に問い掛ける。

「ボクはパス。今の知恵の輪やってて手が話せないからさ」青い短髪に水色の青年が知恵の輪を弄りながらそう答える。

「あたしもパスね。今
「仕事」やる気分じゃないしぃ」金のセミロング、赤い瞳の女性が毛先を指で弄びながらそう言う。

「・・・仕方ないな、オレが行くよ」朱色のシャギーカットに赤紫の瞳の男性はそう言って、街へと姿を消して行った。

「やれやれ、
「愚者」が行ったか・・・俺らは帰るか」先程の人物を
「愚者(フール)」と呼んだその人物は、他の二人にそう促し。
二人は迷いなく了承を出し、それを見た最初の男性は、二人を引き連れて何処かへと去って行った・・・。

「あ～・・・ガス欠って何だよちくしょお・・・もっとしっかりガ

ソリンの残りチェックしときゃ良かったなぁ・・・」健司はそう言ってバイクを押しながらとぼとぼと歩いていた。
「にしても、ホント平和だなぁ・・・」健司はそう言いながら笑みを浮かべながら、至って平和な街を見回す。
談笑する者、無邪気にはしゃぎ回る子供、幸せそうな男女の二人組。
しかし、それを破壊せんとする者も確かに存在した・・・。

「此処いらがちょうど良い位かな。・・・始めるか」
「愚者」と呼ばれた男性はそう呟き。
それと同時に、自身の容姿を、鎖付き鉄球を手にした象を彷彿とさせる姿へと変貌させる。
「・・・さぁて、狩りの時間の始まりだ・・・」そう言って
「愚者」は己が手にした鎖付き鉄球を振り回し、
「殺戮」を開始した。

「はぁあ・・・ガソリンスタンドまでの道程は遠いなぁ・・・何でガソリンの残量チェックしとかなかったんだよ朝っぱらの俺ぇ・・・」健司はぶつくさとそう言いながら尚もバイクを押し続ける。
ゴァァァァン!!!
平和な街には全くミスマッチな破壊音が鳴り響く。
「愚者」の奏でる破壊の音色が・・・。
「んなっ!?何だっ!?」健司はそう言った後、バイクをほっぽりだして、音のした方に駆け出した。
「はっ!!やっぱ人間なんざ呆気ねぇな!!こんなカスが地上にの

さばってるなんて、へどが出るぜ！！」
「愚者」はそう言って己が手にした鎖付き鉄球を振り回し、回りに居た人間の命を一瞬で奪う。
「おい・・・お前・・・何してんだよ・・・！！？」健司は「愚者」に向かってそう怒鳴る。
「あぁ？何だ、人間かよ。見りゃ分かるだろ。ゴミ掃除だよ。ついでにテメェにも死んで貰うがな」
「愚者」はそう言って鎖付き鉄球を振るい。
その鉄球が健司に腹に直撃した。
「ぐぁっ・・・がっ・・・・」鉄球を腹にモロに受けた健司は腹を抱えてうずくまり。
薄れ行く景色の中で健司が見たのは、人間が虫を踏み潰すが如く人間を殺害する
「愚者」と、成す術無く殺害されていく人間達の姿だった・・・。

・・・・・・・・・・・

何処か暗い空間・・・。

「汝、力を欲するか？」何処からか聞こえるその低い声は、健司にそう問い掛ける。

「力ぁ？何言ってんだよ？意味分かんねぇよ」健司は謎の声に対してそう答える。

「・・・力、それは、汝の護る可き者を護る力だ。汝には護る可き者は居るか？」

「俺の・・・護る可き者・・・か・・・俺が護りたい者は・・・有るよ・・・」

「ならば、それを護る為に力を得て見る気は無いか？」

「・・・力、か。良いよ、手に入れてやるよ・・・！！！」

「・・・契約、成立だな」謎の声がそう言うと共に、辺り一面はまばゆい光に包まれた。

・・・・・・・・・・・・

「・・・待ち・・・やがれ・・・」健司はそう言ってゆっくりと立ち上がる。その右手には犀を模した機械が握られており、その腰にはベルトが装着されていた。

「何だ、人間？まだオレに歯向かおうと・・・」
「愚者」はそう言って健司の方に向き直るが、途中で言葉を止める。
「・・・貴様・・・何故それを・・・」

「良く分かんねぇけど、お前だけはぶっ倒してやるぜ！！！」健司はそう言って自身の右手に握られた犀を模した機会を腰のベルトに装着し、こう言う。
「変身！！！」健司がそう言うと共に、健司は白銀の光に包まれる。その白銀の光の中から現れたのは、右手に白銀色の刀剣を持ち、銀色の鎧の用な体を有する戦士だった。

「仮面ライダー・・・ライノ・・・ふん！！ちょうど良い！！！お前を此処で討ち取り、オレら
「タルタロス」の世界征服の礎を気付いてくれる！！！」
「愚者」はそう言って手にした鎖付き鉄球を健司、否、仮面ライダーライノ目掛けて放つ。

「二回も喰らうかってんだよ！！」ライノはそう言って自身の手にした刀剣を振るい、
「愚者」の放った鎖付き鉄球を両断する。

「んなっ、オレの
「ミョルニル」が一撃で・・・クソッ！！！」
「愚者」はそう吐き捨て、ライノ目掛けて突っ込む。

「無駄だっての！！！」ライノはそう言うなり、向かって来た
「愚者」を一太刀、二太刀と切り付ける。

「ぐぁっ！！き・・・貴様ぁ・・・！！！」
「愚者」はそう言ってライノに殴り掛かるが、その一撃は片手で止められる。
「なっ・・・」

「だから、無駄なんだって！！」ライノはそう言って刀剣で
「愚者」を一突きし、突かれた
「愚者」は数メートル吹き飛ばされる。

「がはぁっ！！貴様・・・貴様ぁぁぁぁ！！！」

「そろそろ終わり、行っとくか！！！」ライノはそう言って腰に付けた犀型の機械に刀剣を翳し。
翳された刀剣は、白銀色のオーラを纏う。

「こいつで終わりだぁぁぁぁ！！！」ライノが刀剣を振るうと共に、刀剣を覆った白銀色のオーラが巨大な刃へと変わり、
「愚者」を切り裂いた。

「がっ・・・ぁっ・・・
「タルタロス」に・・・
「タルタロス」に栄光あれぇぇぇぇ！！！」
「愚者」はそう断末魔の叫びを上げ、同時に爆破し、砕け散った。

「やったぜ・・・やったぜ・・・ぇ・・・」ライノはそう言いながら地面に倒れ込み。
それと同時に変身が解け、健司の姿に戻った。

## STORY2　暗躍スル者達

白と黒が混じり合う虚構の空間・・・。

「はぁ？

「愚者」が殺られた？そいつぁどういう冗談だ？」金の長髪、黒い瞳、耳にピアスを付けた大柄な男性が言う。

「冗談なんかじゃ有りませんよ。先程

「愚者」の反応が消滅しました。申し上げ難いですが、彼は殺られたとしか・・・」整った黒髪、黒渕の眼鏡を掛けた黒い瞳の、執事のような服を着た青年が言う。

「おいおいおい、幾ら

「愚者」がオレらん中で一番雑魚だからって、人間風情にやられるなんて有り得ねぇぜ」

「仮に人間じゃねぇ、ってな事は有り得ねぇか？なぁ、

「世界」」深緑の短髪、黒と緑のオッドアイの男性が言う。

「・・・ライダー、か・・・」

「世界（ワールド）」と呼ばれた最初の男性はそう呟いた後、頭を掻き毟りながらうなだれる。

「「戦車」さん、やはりライダーの出現は

「世界」様にとっても、気掛かりなんでしょうか？」

「違ぇな、

「魔術師」、あいつは・・・」

「戦車（チャリオット）」と呼ばれた男性はそう言いかけ、言葉を止める。

「あの方が・・・どうしたんですか？」

「魔術師（マジシャン）」と呼ばれた青年が

「戦車」にそう問い掛ける。

「くっくっく・・・はっはっはっはっ！！！ライダーか！！！そうか、ライダーが・・・楽しそうじゃねぇか！！おい、

「魔術師」！！！」

「世界」は暫く哄笑した後、

「魔術師」に呼び掛ける。

「はい、何の用でしょうか？」

「魔術師」はそう言って一歩前に出る。

「お前、人間界行ってライダー見つけだせ」

「見つけ出して・・・どうすれば良いのでしょうか？」

「魔術師」は

「世界」にそう問い掛ける。

「オレらの事、伝えてやれ。やっと手応えありそうな奴が分かったんだ、遊ばねぇとな」

「畏まりました。伝えるだけ、でよろしいのでしょうか？」

「んな訳、有るかよ。テメェが潰せ。ライダーに教えんのは、仮にテメェが殺られた時の保険だ」

「畏まりました」

「魔術師」はそう言って、その場を立ち去った。

病院・・・。

「健司君、災難だったわねぇ。凄い大事故だったらしいけど？」楓は病院にベッドに寝そべる健司にそう問い掛ける。

「あぁ、ホント大変でしたよぉ。あれ、ニュースじゃ何て言われてるんすか？」

「ん？ガス爆発だって言ってたけど？」

「ガ、ガス爆発ッ！！？」健司は驚嘆からか大声でそう言う。

「け、健司君、声大きいよ・・・」

「・・・あ、すいません・・・んでも、ガス爆発って・・・」

「うん、ニュースでも不自然な部分が有るって行ってた、でも、警察からはガス爆発だって発表が合ったらしいから・・・」

「あれはガス爆発なんかじゃない・・・ガス爆発なんかじゃ・・・！！！」健司はそう言って自身の拳を強く握り締める。

「分かってるよ、健司君。健司君が言ってた怪人って言うのは、ホントの事だと思う。最初に聞いた時は何言ってるんだろう？って思ったけど、ね」楓はそう言って少し苦笑する。

「・・・まっ、誰だって始めは信じられませんよね、あははは」健司はそう言って笑い。

楓もそれに釣られるかのように笑い。
病室には暫し、軽やかな笑い事が響き合っていた。

「あっははは・・・あ、そうだ。健司君、何時退院出来そうかな？私一人じゃ切り盛り出来ないよ、お店」

「あ～、医者の話だと、二、三日位で退院出来そうッすね」

「あ、そうなんだ。じゃ、お大事にね～」楓はそう言って手を降りながら病室を出る。

「あの人相変わらず元気だなぁ、どうやったらあんな元気になれんだろ・・・」健司はそう言ってベッドに横になった。

「健司君は元気そうだったな、良かった良かった」楓はそう上機嫌そうに呟く。

「あの～、すいません」
「魔術師」は楓に、物腰低く声を掛ける。

「はい？私ですか？」

「えぇ、貴女です。この病院に、前のガス爆発事件の生き残りの方がいらっしゃると聞いたんですが・・・」

「あの～、貴方は？」

「あぁ、はい、名前名乗らなきゃ失礼ですよね。僕は烏丸玄人（からすまくろうど）です。で、例のガス爆発事件の被害者の方なんですが・・・」

「えっと、久流健司君ですね、確かにこの病院に入院してますけど・・・健司君とはどう言った関係で？」

「・・・高校時代の友人ですよ、どの病室に居るんです？」

「確か３０１号室だった筈ですよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「魔術師」はそう言って一礼し、その場を去って行った。

（う～ん・・・高校生の時のお友達が何の用なんだろう？・・・まっ、いっか）

３０１号室・・・。

「あの象みたいな奴、俺の事を仮面ライダーライノとか呼んでたよな・・・何なんだよ、仮面ライダーって・・・」健司はベッドに仰向けになり、天井を眺めながらそう言う。

「・・・すいません、貴方が久流健司さんですね？」

「魔術師」は健司にそう問い掛ける。

「・・・あぁ、そうっすけど。・・・誰っすか？」

「僕ですか？僕は

「魔術師」です」

「「魔術師」ぃ？何の冗談すか？」

「冗談なんかじゃないですよ、僕の名は

「魔術師」。先日は僕らの仲間の
「愚者」がお世話になりましたね」

「「愚者」・・・ってあの化け物の事か！？」

「御名答です。彼の名は
「愚者」。別名、エレファントクラウン。僕ら
「タルタロス」の中では最も格下でした」

「「タルタロス」・・・？確か、あの象もんな事言ってたな」

「全く、あの方の口の軽さには呆れますね・・・。まぁ、良いか。
喋っても問題はなさそうだし。僕ら
「タルタロス」は、貴方達人間の破滅を目論む者です」

「人間の・・・破滅・・・！？」

「そうです。その手始めとして、
「愚者」が人間を狩っていたんですが、そこに貴方が現れた」

「・・・俺・・・？」健司はそう言って自身を指差す。

「そうです。貴方は仮面ライダーとして覚醒した。僕らに取っては
貴方の用な存在は障害でしか無いんですよ」

「だったら俺をどうすんだよ？前の奴みたいに俺を殺す気か？」

「ふふっ、またまた御名答です」
「魔術師」はそう言ってパチンと指を鳴らし。
それと同時に、空間が廃工場へと変わる。

「おいおい・・・何だよ此処・・・？」

「病院ですっけ？ああいう場所で闘うのは僕の美学に反しましてね。むろん、心配は要りませんよ。もし貴方が僕を倒せば、元の場所に戻りますから。無関係な人間を巻き込むのは、本意じゃない。」

「へぇ、お前らって皆あの象みたいな奴と同じかと思ってたけど、お前みたいな奴も居るんだな」

「・・・僕をあの方と一緒にしないで下さい」

「魔術師」はそう吐き捨て。

同時に自身の容姿を、右手に漆黒の杖を握った、烏を彷彿とさせる姿へと変貌させる。

「僕は別名、クロウクラウン。所有する武器は、悪魔の貴公子、愛と憎悪の支配者の名を持つ魔杖、ガープです」

「・・・なぁ、お前らって皆自分の武器に名前付けてんのか？」

「・・・というより、武器に名前が付いている、と言った方が正しいですね」

「そうか・・・」健司はそう言った後自身の右の掌に犀型の機械を出現させる。

「変身！！！」健司はそう言って腰のベルトに犀型の機械を装着する。

それと同時に、健司は仮面ライダーライノに変身する。

「それが仮面ライダーライノの鎧ですか・・・僕がその鎧を砕く！！！」

「魔術師」はそう言って手にした杖を前方に翳し。
そこから放たれた黒い波動がライノに直撃する。

「いってっ！！テメッ、やってくれたな！！！」ライノはそう言って手にした刀を振るい、
「魔術師」に切り掛かるが・・・。

「甘いんですよ」
「魔術師」はそう呟いた後自身の背中から漆黒の翼を生やし、飛翔する。

「え！？何お前！？飛べんの！？」

「当たり前でしょう。僕の力のモチーフは烏。羽を生やす事も飛ぶ事も何の造作もありませんよ」
「魔術師」はそう言った後杖を構え。
そこから放たれた無数の闇の波動がライノを襲う。

「うぉっ！！？ちっくしょー、相手が空飛んでんじゃ分が悪いってんだよ」

「ははは、残念ですね。空を飛べない上に、遠距離用の武器を持たない貴方が、僕に敵う訳が無い」
「魔術師」は嘲るかの如くそう言い杖を振るい。
それと同時に無数の闇の波動が地上に降り注ぐ。

「くっそ・・・せめてあの烏野郎を地面にたたき落とせりゃ・・・」
そう言ってライノは
「魔術師」の方を見上げ、何か思い付く。
「・・・あ、その手が合ったか」ライノはそう言って何かを目掛け

て駆け出す。

「何のつもりです？仮面ライダーライノ。何をしようと貴方の攻撃は僕には届かない」

「それはどうかな？」ライノはそう言って一本のワイヤーを切断する。

「今更何をしてるんです？そんな事したって無駄・・・」そう言う「魔術師」の頭上で何かが軋むような音が立ち。

疑問に思い頭上を見上げた

「魔術師」に無数の鉄骨が降り注ぐ。

「んなっ・・・！？」

「魔術師」は自身の両翼を盾の用にし降り注ぐ鉄骨から身を守ろうとするが、その重量に耐え切れず地面に叩き落とされる。

「ぐっ・・・あっ・・・まさか、あんな手を・・・」

「じゃっ、止め行くぜ！！！」ライノはそう言って腰に付けた犀型の機械に刀剣を翳し。

翳された刀剣は、白銀色のオーラを纏う。

「行くぜぇぇぇぇぇ！！！」ライノが刀剣を振るうと共に、刀剣を覆った白銀色のオーラが巨大な刃へと変わり、

「魔術師」を切り裂いた。

「そんな・・・この僕が・・・

「世界」様・・・申し訳・・・ありま・・・せん・・・」

「魔術師」はそう呟き、爆発した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7888e/

仮面ライダーライノ

2010年10月10日21時38分発行